

× PHILLIP BOA & and THE VOODOO CLUB

どんな実験的な音楽にもメロディが必要だね

インタビュー●高村立子
INTERVIEW●TATSUKO TAKAMURA
通訳●渡瀬ひとみ
INTERPRETER●HITOMI WATASE

西ドイツからイギリスに渡り、高い評価を得てきたフィリップ・ボア&ザ・ウッドークラブがアルバム4枚目「ヘアー」にして日本デビューした。ポップでかつ実験的で、メロディアスでかつアヴァンギャルドでもある独自のサウンドは、ドイツのバンドでありながらイギリスの影響を色濃く受けているフィリップ・ボアの音楽体験が元になっているようだ。そんな彼らのルーツやバンドの方針を中心人物であるボアに話してもらった。

ドイツ出身で、主に西ドイツを中心に活動しているのに、歌詞は英語が中心ですね。それは英語でしか自分達のアイデンティティを表現できないから？ それとも世界で通用するためですか。

「もちろん、我々はドイツだけでなく、インターナショナルなバンドになりたいという願望が常にあります。単純にそれだけだよ。デビュー当時はイギリスの方に人気があったし、日本でもどこでも世界的に共通するのはやっぱり英語だと思うからね」

でも単に英語だからイギリスで受け入れられたという訳ではないと思います。なぜアメリカやドイツでもなくイギリスだったのでしょうか。

「それはファーストとセカンド・アルバムがイギリスのレーベルでディストリビューションされたということと、その2枚のサウンドがひどくドイツっぽかったからだと思う。今のイギリスにはイギリスっぽいバンドがあふれているんだ。そんな中で我々の音は新鮮だったんだろうね」

それでポリドールとの契約に至ったのですが、移籍第1弾の「COPPERFIELD」では、ジョン・レッキーがプロデューサーですね。音もイギリス的になっていて私は今一つという気がしたのですが。

「僕は初期のシンプル・マインズや

XTCを気に入っていて、ジョン・レッキー——人だけをプロデューサーとして迎えた。アルバムの決定権はすべて彼にあったし、そこで我々はイギリスのバンドになりきろうとしていた。結果は余り納得のいくアルバムではなかったね。前2作の方が、まだよかった。クラシックの影響があり、実験的だったからね」

影響を受けたのはやっぱりイギリスのアーティストが多いのですか。「それだけじゃないよ。ドイツではクルト・ワイルにかなりの影響を受けた。他にもカン、ノイ、シエツックハウゼン、パッハとかね。」

イギリスでは60年代のバンドに、

でもあつし、それでいてロックでもあるし、実験的でもあるし、クラシックっぽくもある」

プロデューサーに4人の大物を迎えています。それもあらゆるスタイルを取り入れるためなのでしょう。何か他の意図はありますか。

「トニー・ヴィスコンティのような人達の手を借りて、プロフェッショナルなアルバムを制作したかったんだ。トニー・ヴィスコンティはグラム・ロックやストリートなポップ・ロックっぽい音を手掛け、トニー・タバナーは、もっとヘヴィなモータールヘッドのようなものか得意だし、ナイジェル・ウォーカーは例えば、

ものに思われます。決まり切ったリズムに対するアンチの姿勢が根底にあるのでしょうか。

「うん、我々は奇妙で風変わりなアヴァンギャルドっぽい音楽をやりたいんだ。それだけでなく、いいメロディの必要性、ポップ性も考えている。どんなに実験的な音楽にもいいメロディが必要だね。そうじゃなきゃ、みんなに受け入れられないと思うんだ」

あなたはバンド活動以外にもコンストラクターというインディペンデントなレーベルを運営していますが、既存のドイツ音楽シーンに危機感を感じたいものを感じていたからですか。「新たな息吹、エネルギーをもたらしたかった。みんなバンクっぽくて、ノイズで、エネルギーなバンドばかりだし、アタ・タックや普通のドイツのレーベルより、イギリスよりのサウンドのバンドが多いね」

87年にリリースされたコンストラクター・レーベルのオムニバス・タイトルは「TEN YEARS AFTER THE GOLDRUSH」ですが、それにはバンク勃発10年といったレーベルの存在意向の表われなののでしょうか。「そうだよ。コンストラクターのバンドは10年前の音楽を通過して進化し、90年代のエネルギーやパワーをもったバンク・アーティストばかりで、「GOLD RUSH」っていうのもそういう意味なんだ。現在のイギリスのバンドの多くは60年/70年代のルーツにもどったりして何も新しいことはやっていない。ロックではアメリカのほうが面白いね」

ドイツのバンドは今、一般的に見てどうなのですか。

「正直いってつまらないね。みんなアメリカのREM、ハズカー・ドウあたりをコピーしようとしている。でも、基礎としてはまあまあじゃないかな。成長するにはあと4、5年かかるけどね」



かなりの影響を受けたと思う。ビートルズ、ストーンズ、初期のピンク・フロイド、レッド・ツェッペリンなど……バンク・ムーヴメントも結構好きだったしね」

最新作はすごく多彩な仕上がりで、そういった影響が一番色濃くでているものといえますか。

「そうだね、このアルバムは、僕の中にある90年代のブリティッシュ・ロック・ミュージックを反映していて、もう一つには僕の中にある、さっきいったドイツの音楽のルーツが反映されているんだ。それは僕の一冊の「マニフェスト(声明)」みたいなものなんだ。4枚のアルバムの中では一番完璧なものなんだ。ポップ

デヴィッド・シルヴィアンと仕事をしていたり、とてもエスティックなところがあるんだ。こういう風に、あらゆるスタイルのプロデューサーを使ったから、いろいろなスタイルの音楽が一つのアルバムの中にみられると思うんだ。すごく満足しているよ」

コンセプトは？

「実験的に作曲しながら、最終的には「フィリップ・ボア&ザ・ウッドークラブ」の音にすること」

そのフィリップ・ボア・サウンドっていうのは、アヴァンギャルドなリズムとポップなメロディが主体となっていますが、それはロックンロールのリズムからは意識的に離れた

CB